

## 第Ⅱ部 研究報告

「通常学級の生徒の6.5%が発達障害ではないかと考えられる。」という調査結果が報告されていますが、今、多くの高等学校で、学習・生活・行動・人間関係の形成がスムーズに行えない生徒の姿が目立つようになりました。

- ・人と関わることをせず、スマートフォンばかりをさわっている。
- ・授業中の私語が止まない。
- ・会話が一方的で、話のキャッチボールができない。
- ・ささいなことを指摘されただけでパニックを起こしてしまう。

というような姿です。

こうしたことが一過性のものでなく、失敗やトラブルを繰り返す原因となっている場合があります。発達障害ではないかと考えられるケースですが、それが発達障害によるものであろうとなかろうと、改善が望まれることに変わりはありません。

このようなケースが増えてきている状況を踏まえ、一人一人の生徒をしっかりと理解し、本人や保護者とともに必要な手立て・支援を考える。また、教育活動の内容を工夫する。それが、間人分校の研究の中味です。本日の発表の柱は、

- ① 生徒理解とアセスメント、個別の支援
- ② 授業のユニバーサルデザイン化
- ③ つながる力の育成
- ④ 教員のスキルアップ

の4つです。それでは、研究報告を始めます。

生徒理解からアセスメント、個別の支援につなぐ流れについて発表します。

間人分校では、中高連携による情報の移行に始まり、教員の気づき、生徒自身のセルフチェック、職業適性検査、hyper-QUの活用、個人面談等をとおして、生徒一人一人の重層的な理解を心がけています。

教員の気づきを促進するために、基礎学力診断テストと授業スタートアンケート、教員気づきアンケートを行っています。

セルフチェックには、社会性チェックリストと進路準備状況について整理するためのシートを使います。結果は生徒にフィードバックするとともにソーシャルスキルトレーニングなど、教育活動の参考にしています。

職業適性検査は、紙筆検査だけでなく器具検査を実施しています。器具検査は、ハローワーク峰山から器具を貸していただき、1ヶ月かけて昼休みに生徒を2人ずつ呼び出し、1年生から3年生までのすべての生徒に対して実施しています。

hyper-QUは昨年度から導入しました。今年度は、大阪市内で開催された「学級づくりの鉄則セミナー」に教員2名が出席し、校内で研修成果を伝達してもらいました。

hyper-QU の分析結果は教員の気づきの裏付けとなり、指導・支援の方向性を考える際に役に立っています。

個人面談は、年間5回実施しています。また、生徒の指導にあたっては、一方的に叱るようなことは避け、相談的な対応を心がけています。

生徒理解の取組によって得られた情報は集約をし、教育相談会議を開いて情報の共有を図ります。ここから、個別の支援が望ましいと考えられるケースについては、スクールカウンセラーの活用、丹後地域教育支援センターよさのうみの巡回相談へとつなぎます。進路選択の段階まで来たところで進路連携会議を行い、進路の方向性と支援のあり方について確認を行い、ケース会議へと移行します。

進路連携会議には、ハローワーク峰山、京丹后市障害者福祉課、「くらし」と「しごと」の寄り添い支援センター、障害者就業生活支援センターこまちななどの関係機関に出席をお願いし、研修・求人に係わる情報提供や職業評価・就労体験の段取りなど、さまざまな形で協力を得ています。

支援のスタートは、教育現場での気づきです。教員は、気づきの感度を高めるための努力を怠ってはならないと思います。教育活動と教育相談が両輪となり、本人の成長と保護者の変容を促します。その際に、本人・保護者の思いを尊重することと、関係機関との連携が大切です。そして、こうした営みは決して一方的な援助ではなく、当事者と支援者の相互育ちであり、支援者にも成長をもたらすのだと思います。

授業のユニバーサルデザイン化について発表します。

「ユニバーサルデザイン化」とは、支援が必要な生徒にとっては「なくてはならない。」、その他の生徒には「あれば助かる。」、そして誰にとっても「あることが妨げにはならない。」さまざまな手立て、つまり支援を要する生徒を基準にして組み立てる授業実践のことです。

まず本校では、各教科においてふり返り学習（ふりスタ）を取り入れています。いきなり教科書の内容を扱うのではなく、すべての教科で、中学校、小学校の内容までさかのぼった復習を行っています。また、1年生においては、総合的な学習の時間に国語、数学、英語の復習プリントに取り組んでいます。この取組においては、生徒の意欲を高めるよう「間人式検定」として実施し、成績優秀者を「マイスター」として認定しています。3年生と4年生の総合的な学習の時間には、間人式漢字検定を行い、生徒それぞれのレベルに応じた学習に取り組んでいます。さらに、数学科では、教育課程外の自主学習の取組として「間人式計算ドリル」を行っています。対象は1年生から3年生までとしており、毎朝のSHRで担任がプリントを配布します。負担感を持たせないようA4サイズ、10問に精選した構成にしており、提出は義務つけていませんが、6割から7割の生徒が毎回提出するようになりました。

次に、各教科の工夫を紹介します。

国語科では、教科書の漢字を黒板に書き出し、ふりがなを添えています。生徒の反応を待ち、言葉を拾いながらクラス全体で読みを確認しています。

地歴公民科では、黒板にマグネット式の白地図を貼り付け、都道府県や国の名称、位置、周辺情報を関連付けて学習しています。

数学科では、毎時間プリントを配布しています。教材を精選することによりスムーズな学習を促すとともに、返却したプリントをファイルに綴じさせ、前時のプリントを参考にしながら主体的に学習に取り組めるようにしています。その工夫が、成果として「間人式計算ドリル」の定着につながっているといえます。

理科では、実験器具などを提示する際に、実物を教室に持って行き、手に取らせて意識づけるようにしています。

英語科では、図を入れたシートを作成し、イメージを持たせながら単語を覚えさせます。カタカナで発音を表示することにより、声を出しやすくする工夫も行っています。また、音読をする際にはクラス全体で輪になり、お互いの声を聞きとりやすくするとともに協働の意識をもたせる工夫をしています。

商業科では、教材提示装置を使って、配布したプリントをそのままスクリーンに映し出し、複雑な指示を伝わりやすくしています。

こうした手立ての効果を高めるためには、授業のルールを徹底することとほめ方を工夫することが大切だと考えています。「何をしなければいけないのか」また「何をしてはいけないのか」をはっきりさせることにより、生徒は活動しやすくなり、また、余計なことをして注意される場面を回避することができます。指示が通りやすくなり、その結果として、たとえばきれいに整理されたノートができあがります。きれいなノートができ上がれば、そのことを取り上げてほめることができます。ほめてもらうことにより、望ましい行動がさらに強化され、正のスパイラルが生まれます。

私たち教員は、直すべき点を指摘すること、言わばダメ出しをしがちで、良い点を見つけ出してほめることを余りしようとはしません。上手にほめることは、むずかしいことなのだと思います。消極的な方法かもしれませんが、相槌を打つことは大変有効だと思います。無条件に生徒の発言や行動を支持することになるからです。これも、「承認する」という一つのほめ方です。

もちろん、積極的な方法も研究しています。国語の作文練習や英語の英文の暗唱においては、クラス全体で取り組み、たとえば「漢字で書けましたね。」「最後まで覚えられましたね。」というように、できたことを確認し、一人一人が頑張れたと感じていることを取り上げて、「その場で」「すぐに」「具体的に」ほめる。他には、「ノートの内容を丁寧に整理し、復習をしている様子がわかればプラス評価をする。」「プリントがしっかりとできあがったらシールを渡し、ファイルに貼っていく。」というように頑張ったことが形や結果に現れるような工夫をしています。

テスト問題の作成についても教科間で協議し、工夫をしています。生徒の混乱を少なくしスムーズに解答できるよう、「一つの設問で問うことがらを一つに絞る。」「解答らんの作り方を工夫する。」「例を示す。」「見易さを考え、「文字のサイズを標準より大きくする。」「フ

ォントは丸ゴシック体を用いる。」「行間を詰め過ぎず、図は大きめにする。」などです。

次に、つながる力の育成について発表します。社会に参加することは、人とつながることだと言ってもいいと思います。他と協調しながら、自分の考えを主張できる力を育むために、教育活動のさまざまな場面にコミュニケーションとプレゼンテーションの要素を取り入れています。

まずは短歌講座です。短歌講座は、1・2年生用のメニューと3・4年生用のメニューを用意しています。1・2年生では「親しませる」ことを目的として百人一首のカルタ取りを行いました。3・4年生では短歌の創作に取り組みました。この写真は、鳴き砂で有名な琴引浜に行き、創作活動をしている様子です。全員が一首から三首の短歌を作り、作品発表を行いました。生徒作品を京丹後市小町ろまん短歌大会に応募したところ、4年生の作品が佳作を受賞しました。

次に茶道体験です。3・4年生を対象に実施しました。講師は京丹後市内で茶道教室をされている方で、礼の仕方・お茶の点て方・出し方・いただき方をしっかりと教えていただきました。伝統文化の良さと和敬清寂の精神、人をもてなすことの基本を学びました。

続いて自己PR力向上講座です。京丹後コミュニティ放送FMたんごから講師を招いて実施しました。一人一人がPRを行い、講師からアドバイスをいただきました。1・2年生は丹後の魅力、3・4年生はインターンシップや就職・進学の実験に向けての意気込みをPRしました。

毎年、文化祭に地元の老人会の方たちを招き、交流をしています。昼休みには育友会にうどんを作ってもらい、参加者全員で食べます。この取組は、毎年の恒例になっており、老人会から太鼓やダンスに入るよう誘いがあると、生徒たちは尻込みすることなく参加をしています。

本研究事業のスーパーバイザーである佛教大学菅原伸康准教授のゼミの学生さんたち5名に来てもらい、1・2年生はスポーツ、3年生は室内ゲーム、4年生はサイコロトークで交流を楽しみました。交流の内容は生徒が企画したのですが、1・2年生に比べて3年生、4年生は、よりむずかしい内容に挑戦してくれたと思います。

こうした活動を行うことにより、自主的な取組においても、生徒たちが外に出て積極的に活動するようになりました。毎年、丹後府立高校校長会の主催で実施される丹後府立高校・与謝の海支援学校交流会には、昨年度から参加を始めました。また今年度は、丹後教育局が主催する小学校の放課後学習を支援するボランティア活動の「プラスワンスタディ」にも参加をするようになりました。

次に、1年生の取組である「つながる力向上プログラムα」について、説明します。本校は平成23年度に京都府教育委員会学力向上フロンティア校の指定を受け、それ以来、さまざまな取組を進めてきました。授業のユニバーサルデザイン化により、生徒対象のアンケート調査においては「授業がわかりやすい。」と答える生徒が大多数を占めるようになりましたが、その一方で、コミュニケーションに関する課題が見えてきました。具体的に

は、「挨拶をする。」「わからないときは質問をする。」といった、社会生活において最も基本的なコミュニケーションスキルが、十分には身につけていないという課題です。このことは、インターンシップなどにおける企業の方の評価からも裏づけられます。

昨年度、1年生を対象とする「つながる力向上プログラム」をスタートさせました。昨年度の内容は、担任が中心となって試行錯誤の末に創りあげたものでしたが、今年度は生徒アンケートの結果を参考にしながら、ソーシャルスキルトレーニングを多く取り入れた内容にリニューアルし、計画的・組織的な実施に努めています。また全国の先進校を視察するなど、教員がスキルアップに努めながら内容の充実を図っています。

1学期と2学期に実施したレッスンの概要について紹介します。副校長室と相談室を利用したソーシャルスキルトレーニングです。内容は、「入退室」と「荷物を届ける。」「面接を受ける。」「インタビューをする。」です。相談室には1年生の授業を担当している教員、副校長室には副校長を配置し、全員に両方の部屋に行かせました。同じ内容でも、人や場所を変えることには効果があり、生徒はTPOを意識するようになりました。また、1学期と比べて2学期には向上が見られました。普段は人と話さない生徒にも一定の努力をする姿が見受けられ、態度が柔らかくなりました。また、全員がオンとオフのモードの切り替えの必要性を理解したように感じられます。

本校は、一昨年度から、愛知県立刈谷東高等学校の兵藤友彦教諭が実践しておられる学校設定科目「演劇表現」の内容を取入れるよう試みています。その内容を言葉で表現することは簡単ではありませんが、ペアワークやグループワークをとおして感情や相互の関係の変化を促し、自然な態度で人とつながる力を育むものであると言ってもいいのではないかと思います。今年度も9月と2月にワークショップをお願いしていますが、9月には人と協調的な態度で向き合うこと、グループで活動することの楽しさを知ってくれたと思います。

他の学年の取組を紹介します。2年生では、企業見学を実施しました。老人福祉施設で職員が入居者と関わる様子、スーパーマーケットのバックヤード、自動車部品工場の製品加工の現場など、普段は見ることのできない職場の様子を見学しました。3年生では、インターンシップを実施しています。一人一人を京丹後市内の別々の事業所で、実際の業務を体験します。3年生、4年生では社会人講話を行います。進路の選択・実現のために参考となる内容に加えて、4年生ではマネープランや消費生活問題など、社会的な自立に役立つ内容を取り入れています。

修学旅行は3年生で実施しています。沖縄、2泊3日の旅行ですが、今年度から民家宿泊体験を取入れました。ホテルでの宿泊では体験できない、濃密な人とのふれ合いがあり、生徒たちはとても感動していました。

学校全体の取組を2つ紹介します。

7月に聴覚障害理解学習会を実施しました。講師は本校の卒業生で、現在は京都市内の大学に通っています。聴覚障害について共感的に理解をし、自立への思いを受け止め、周

困からの支援の在り方について考える機会になりました。同時に、先輩の姿が一つの模範となり、進路に対する考えが深まりました。

11月には上級学校見学を実施しました。本校の卒業生は、大学に進学することがほとんどありません。わが国の大学進学率は50%を越えましたが、本校の生徒にとって、大学は身近であるとは言えません。そこで全校で福知山市内の成美大学並びに成美大学短期大学部を訪問しました。午前中は学校説明、午後は模擬授業を受講しました。また、昼休みには学食で昼食を摂り、正に一日大学生体験をしました。この取組は生徒にとって新しい世界を知ることであり、進路に関して視野を広めることにつながりました。

最後に、教員のスキルアップと丹後地域支援学習会についてお話ししたいと思います。本校における特別支援教育の実践はまだまだ建設途上ですが、全体の取組としてしっかり根付いています。23年度は足並みがそろわない感じでしたが、昨年度から全員が一つになって走り出しました。

校内研修としては、4つの研修会（※「発達障害のある生徒への指導・支援とソーシャルスキルトレーニング」「障がい者の就業の現状と課題」「生徒理解・保護者理解とストレスマネジメント」「障害者の職業評価」）を実施し、教員全員が受講しております。このうち、「障がい者の就業の現状と課題」は網野高校の本校と分校が合同で行ったものです。また、「障害者の職業評価」は公開研修会とし、近隣の学校とハローワークなど関係機関にも参加を呼びかけたところ13名の参加がありました。

今年度の京都府総合教育センターの特別支援教育に係わる講座の受講状況は、20講座、延べ22人です。

丹後地域教育支援センターよさのうみの、土曜講座には、延べ8人が受講しております。

また、特別支援教育コーディネーターによる研究協議会、大学や大学の附属特別支援学校、発達障害者支援センターが行う公開研究会など、合計27の機会に延べ33人が参加しました。

先進校の視察についても全国の高校、大学、医療少年院、合計14校を延べ16人が訪問しています。

このたびの文部科学省からの指定をきっかけとして、本校と本校育友会が主催し、丹後地域支援学習会を開催しております。さまざまな課題のある高校生に適切な支援を行い、社会的な自立を促進するために、私たちは何をすればよいのか、地域ぐるみで考えましょうという趣旨のもので、本日も第4回丹後地域支援学習会として実施しております。おかげさまで、延べ400名以上の皆様に御参加をいただきました。学習会のたびに生徒の発表を取り入れさせてもらい、本当によい学習の機会となりました。以上が、本校からの研究報告です。